
バストリップ

teddy

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

バストリップ

【Nコード】

N7810R

【作者名】

teddy

【あらすじ】

大きな胸の谷間にネクタイを挟んだ女。彼女に惑わされて、男は気を失ってしまう。彼が目を覚ますと、そこは見知らぬ街だった。

胸の間に挟まっているネクタイの先を掴み、勢いよく引き下ろす。すると彼女のシャツはするりと縫解けてしまった。洗い立ての白色に視界を遮られている間、洗剤の匂いと彼女の柑橘系の匂いが混じる空気の中で、私はどうしてこんなことになったのかと考えている。多分、彼女のシャツは背中の後ろでボタンを留める形式だったのだろう。そして、彼女はボタンを一つか二つしか留めていなかったのだ。もしかすると彼女は身体が固いのかも知れない……。シャツの影が私を覆いつくした。背中にボタンのあるシャツ。それまで、私はそんなシャツを見たことがなかった。私は手元の赤いネクタイを見つめる。血のように赤いネクタイだ。今にも溶け出し手からこぼれ落ちてしまいそうである。

シャツを脱いだ彼女の姿を想像してみる。本当に美しい女性とは、一糸纏わぬ時にも美しいのだ。はたして彼女はどうかと、ネクタイを持った手を顎に当てる。柑橘系の匂いが、ここにもした。私は目を閉じて深く息を吸い込む。何の果実かと気になったのだ。「もういいかしら」とシャツ越しに彼女の声がした。「あ、目は開けないでね。わたしはにも準備があるの」

「……手品でもするのかい」と私は尋ねた。

彼女は愉快そうに笑う。

「ええ、まあそうね。そういう表現も可能だわー！。シャツをどけたら、目を開けてもいいわよ」

そして彼女はシャツに手をかける。その振動が布地を通して私に伝わってきた。

「バイバイ、良い夢見てね」

そしてシャツは取り払われ、ぱっと視界が明るくなった。シャツ自体が輝きだしたように感じたし、雷に打たれたような気もした。

頭の中が真っ白になる。白い光は頭を瞬時に埋め尽くした。脳の核が弾け飛んだような気がした。そして、私の意識は奈落に落ちた。

インク壘を落としたような音が聞こえた。硝子と硝子を擦り合わせるような声が耳の奥から上ってきていた。インクが染み渡っていくようにして私は意識を取り戻し、ぼんやりとした視界をじっと見つめていた。悲鳴は遠くなって行って、消えた。

私はベンチの上にあった。そのことをゆっくりと考えて、異変に気づく。私はそれまでベッドの上にはいたはずだ。頭の中が急にクリアになった。私は周囲を見回す。どうやら、バス停の待ち合い室のようだった。木で出来たドーム状の小屋である。

ベンチは古い物だった。木製で、所々穴が開いていた。揺らしてみるときしぎしと音がする。少し力を入れて蹴り飛ばせば粉々になってしまうそうだった。私は立ち上がり、小屋の中を調べてみる。掲示板には、色褪せてもはや内容の判別出来ないチラシが張られていて、針の曲がった画鋏が刺さっていた。ペンキの空缶には、煙草の吸い殻やコンドームの箱が入っていた。こんな壊れかけたベンチで事に及ぼうとした者のことを考えると、少しむず痒い思いをした。私にもそういうような時代があったのだ。ともかく、小屋の中には私の状況を説明出来るようなヒントが一つも無かった。

小屋の入り口に立つと、正面にバス停が見えた。場所くらいは分かるかもしれないと思っ、外に出ようとしたが、そこで雨が降っていることに気づく。酷い雨だった。うかつに身体を濡らせれば、蜂の巣になるのではないかと心配になる。私は身の回りに何か身を守るものがないか探してみる。手の中にネクタイがあった。彼女のものだ。

ついに諦めて、私は雨の中に飛び出した。心配は杞憂に終わり、私は傷一つ負わなかった。ただ群れを成した雨粒は滝のようで、痛みはあった。私は背中を丸めながら、バス停に駆け寄る。ままよという思いで顔をあげて、幻滅した。バス停には「七丁目」と書かれ

ていた。それだけだったのだ。これでは何のヒントにもならない。私は小屋に戻った。

私の知る限り季節は真夏のはずだったが、雨に濡れた私は震えることになる。大の大人が上半身裸で両腕をさすっているというのは、冗談じみている。私は笑おうと努めてみた。しかし、「は、は、は」と続けた所でてきてきたのは大きなクシャミだけだった。小屋は震え、たし、ベンチは大きくみしりと音を立てた。このままでは凍えて死んでしまうと判断した私は、右手に握ったネクタイを着けることにした。かじかむ手で首にその薄い布を巻く。鏡が無くて安心した。どう鼻屑目に見ても、半裸のネクタイ男というのは馬鹿げてた。私は彼女のシャツの事を考える。あのシャツが今すぐに欲しかった。

そこに悲鳴が聞こえた。今度は雨の向こう側から聞こえた。私は反射的に立ち上がり、雨の中に飛び出した。頭の中は、胸の大きな女の事でいっぱいだった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7810r/>

バストリップ

2011年10月8日22時43分発行